

---

# **姫には花を、騎士には剣を ~名も無き墓には花束を~**

雨月

---

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ  
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。  
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または  
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ  
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範  
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し  
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

姫には花を、騎士には剣を／＼名も無き墓には花束を／＼

### 【Zコード】

Z8742F

### 【作者名】

雨月

### 【あらすじ】

黒羽姫也は少しふつきうぼうな十代の少年だった。日々を若干少  
ない友人と過ごしていくうちに自分があまり知らない日々を経験し  
ていくこととなる。

## (前書き)

ただいま片手を負傷中ですが昨年からやり続けていたものが何とか完成?しました!短編にするには長いような、また連載にするには短いような気がした結果……短編にすることにしました!説明するよりみたほうが早いと思いますので、読み終えた人は感想くれると嬉しいです!

この小説はフィクションです。実在の団体名、会社名とは関係ありません。小説を見るときは部屋を明るくして画面から30センチほど離れてから読んで下さい。

抜粋……

「何か勘違いなさつてますね……」

「コホンと、相手は一つ咳払いをして未だに目を閉じている姫也に告げたのだった。

## プロローグ

ふと、青空を眺めるが特に変わったことは無かった。

「黒羽君？ちゃんと聞いてますか？」

今年新しく先生になつたらしい人の注意に促されて黒板を眺める。「こんな」とは教科書にだつて載つていると姫也は思い、再び青空を眺める。

「…………」

この青空はどこまで続いているのだろうか……そんなことを思いながら。

姫には花を、騎士には剣を～名も無き墓には花束を～

「ぐつふあーー！」

そういうて一人の男子高校生が壁に背中をぶつけた。その唇から

は血が流れていた。膝をガクリと地面につけて荒い息をして呼吸を整えておりその間も、彼の口からは深紅の血が流れて小さな血溜りを形成しつつある。その男子高校生の名前を黒羽姫也といつた。

「ふう、まったくもう！あんたも懲りないわね？」

男子高校生を壁にたたきつけた相手は空手の構えをとつていて彼に強烈な一撃を食らわした張本人である。名前は鶴来舞つるぎまこといつて姫也のライバルにして幼馴染でもある。

「大丈夫なの？血が出てるわよ？」

「問題ねえ！」

そういうて足ががくがく震えながらも姫也は中性的なその顔に苦悶の表情を貼り付けながらも立ち上がってファイティングポーズをとつたのだった。

「あつそ、相変わらず負けず嫌いねえ？」

やれやれ、困ったものだといった調子で再び目を細める。それだけで人懐っこいそうな普段からだいぶ違った印象を受けて男子の中には彼女に殴られたい、蹴られたいという変な連中が増え、女子から……特に下級生からは義妹にしてくださいとかお友達がお願ひしますといった変わった手紙が届いたりするのである。

「がはつ！！」

そして、その後も誰が見ても一方的な決闘は続けられたのだった。

姫也はぼろぼろのまま五時間目、六時間目を先生の心配そうな視線を受けながら終えるとそのまま家に帰る。彼にも以前は所属していた部活があつたのだが舞との喧嘩で退部になってしまった。

「あ～あ、誰かさんのおかげで私まで退部になつたんだけどなぁ？」

無論、舞も退部となってしまつていて一年生の間は部活に所属する権利を剥奪されており、もうこのまま一人とも帰宅部で過ごすだろうと大体の生徒からは思われていた。さらに、学校中からはこの一人は付き合っているのではないだろうかと思われているのだが、彼らは付き合ってはいない。

「…………ふん」

舞にそんなことを言われて非難めいた視線がそれだけで姫也を苦しめていた。ひしひしと責任を感じてはいるのである。あれは確かに原因を作ったのは舞のほうであり、姫也ではないのだがそれでも責められると自分のことを姫也は責めてしまうような性格だった。

「あ…………」

突然、姫也は舞を残して走り始める。

「あ！待ちなさいよ！」

足では舞は姫也に勝てたことが一度もなかつた。

この点では辛酸を毎度なめさせられていて幼少の頃これで姫也に助けられたことがあった。その一件がなかつたらこうして姫也のストーカーみたいなことはしていいだろう。そもそも、家に帰りつくり毎日毎日ばらばらの通学路を使用しながらそれでも舞は姫也の近くを歩いており毎年の通つた場所は二人とも一緒だつた。

「はあ…………はあ…………」

姫也は路地に捨てられていたダンボールの中にいた子犬を抱き上げていた。その表情は五歳児の喜んだときの表情で仏頂面を普段からしている彼とはまったくの別人。実際、舞がその写真をとつて友達に見せたところ……

「誰？新しい彼氏？とつとう姫也君ふつたんだ？…………うわあ、年下好き？」

「…………」

そんな感じであった。

しばし、子犬と戯れないとどうやらこの子犬はまだ親がいたようで警戒しながら大きめの犬が姫也たちのところにやつてきていた。捨て犬ではないのかと疑問に思つたがただ単にダンボールの中に入つてしまつただけなのかもしれない。

「ひ、姫也あ…………犬が…………」

舞は幼少の頃犬に襲われたことがあり、大きめの犬が大の苦手だつた。子犬といえど例外ではなく、舞の目には悪魔のように映り姫也のあどけない表情がよく映えるわけだが。

「ああ？ そうだな、母さんが迎えに来たんだな。よかつたな、おまえ」

そういうでうらやましそうに姫也は唸つてゐる親犬を見た。そこで、若干顔をしかめ、訂正した。

「わりい、父さんだつたみたいだ」

子犬をアスファルトの上に放すと子犬はキヤンと一度だけ姫也に向かつて鳴くとそのまま親のもとへと走つていつた。既に姫也は仏頂面で犬のほうを見ていなかつた。

「姫也……」

「ああん？ 何だよ？」

これである。

誰かが姫也に一步近づけば姫也は下がる。人が怖いからである。

おびえている犬にある程度以上近づくとその犬は逆に襲い掛かつてくるものだ。

そして、大抵の人間は恐ろしく思つて近づこうともしないわけで、姫也は学校では不良扱いされていた。

もつとも、成績、出席数、態度などは真ん中より上なのだがそいつた怖いという感じを受けてしまうからだろう。友達は右手だけで足りるほど少なかつた。意外と寂しがりやな姫也は朝早く学校に行つて女子が一人だけだつたりすると話しかけたりして相手を驚かせていたが今ではその人と友達になることが出来てしばしの嬉しさを味わつてゐる。それと、他人のうれしそうな顔を見るのも姫也は好きだつた。

「えつとさ……」

「何だよ？ さつさと言つてくれよ。また、喧嘩か？ そんなに好きか

？ 喧嘩？」

姫也にとつて嫌いなものは暴力だつた。まあ、まだあるのだが……ただ、嫌いな暴力に対抗できるものも暴力しかないと思つてゐるし、他人に暴力をふるつてゐる自分もあまり姫也は好きではなかつた。

「違う！ 嫌いよ！ そうじやなくて……」

「何が？ 僕、誤字脱字したか？」

「いや、してない！」

「じゃ、なんなんだよ？」

普段だつたら一言ほど話して第一ラウンド開始となるのだが、子犬と戯れていたおかげか姫也には若干の心の余裕があつた。まどろっこしいんじやああ！！とかいいながら襲い掛かつてしたりする。

「え、えつとわ……その、今度の日曜日……」

舞は今日こそ姫也と遊びに行く約束をしようつと思つていて、今日ならいけると思つていたのだが……第三者が乱入してくることを頭に入れていなかつた。

「今度の日曜……なんだよ……ぐふあつ……」

その第三者のどび蹴りによつて姫也はそのままアスファルトに叩きつけられた。

「いつてえ！ この野郎！」

「あたしは女だ！ だから！ このアマが正解！ すかたん！ この馬鹿兄貴！」

すぐさま立ち上がりつて殴りかかつた姫也の腹部に手加減なしのけりが入る。

「ぐふあつ！ ！」

そのまま青いポリバケツの中に入つて姫也は動かなくなつた。舞は茫然とその光景を見ていた。

姫也を吹き飛ばした相手は制服についた埃をぱつぱつはらつて一息をした。

「まったく！ 帰つて来るのが遅い！ 舞先輩にも迷惑かけてるじやない！」

腰まで長い髪を伸ばしていて若干釣り田味の田を「ミ箱に入つてぴくぴく動いている姫也に向ける。

舞は乱入者、黒羽辰子につんざりした顔を隠しもせずに向けていた。

「…………あ、あの、辰子ちゃん？」

「ん？ 何ですか？ 舞先輩？」

舞は今度はものすごく困った顔でこの純粋な子にどうしたらよいものか決めかねていた。そして、その猶予の間に姫也は意識を復活させて頭の上に器用にポリバケツのふたをボウシみたいにして怒りに震えていた。

「きょ、今日じゃ……今日じゃーあの夕田に沈めてやります……！」

「はん！ 望むところだ！ ぐそ兄貴！」

「ぐわしつ！ ……げしつ！ ……！」

「ぐつはあ！ ……」

電柱に右頬をぶつけ、そのまま姫也はアスファルトに沈んだのだった。

「つたぐ、世話の焼ける…………舞先輩、失礼します」

「え？ あ、うん」

うんうん唸る姫也を背中におんぶして夕焼け迫る住宅街を黒羽兄妹は走っていましたのだった。もつ、家だって見えていとこつ近い場所だったので舞の家もすぐそこにいる。

「はあ…………いつも、いいタイミングで辰子ちゃん来るんだよなあ

…………」

とほとほといった調子で舞も帰路についたのだった。

「辰子」

「何よ？」

「晩飯うまかった。ありがとな

「当然よ」

Hプロン姿の義妹にそういって姫也は一階の自室へと引っこんで

いつた。

「ふう、皿洗い終了」

辰子はそういうリビングに飾つてある家族写真をみた。そこには笑つている辰子、父、母、そして全てを拒絶するよつた瞳をした少年……姫也の姿があつた。

これは辰子の父がどれほど姫也が変わったか将来の姫也に見せるためにわざと当時とつた写真である。今は旅行中で父母いないが家族揃つて夕飯を食べた後、一週間に一度は写真の話題になつてそのたびに姫也は顔を真つ赤にして逃げるのだった。本当に、あの頃からあの馬鹿兄貴は変わつたものだとしみじみ辰子は思うのだった。まあ、学校での評判はあまりいいわけではないのだが。

あの子は盾にはなるが矛にはなれない。

父の言葉がふと、頭に出てきた。

矛になんてなれなくていいだろ。矛は自分がなれる。

辰子には自信があつた。

電気もつけないで姫也は部屋の扉を閉めた。そこには闇が広がつているだけだった。

「？」

闇が「う」めいたような気がしたが氣のせいだろうとこうことで電気をつける。何もなく、そこにはいつもの部屋が広がつているだけだった。

「いつてきます」

朝に弱い辰子を置いて、無論、お隣の舞と一緒に学校行こうぜ？とか誘いもせずにまっすぐに学校へと姫也は向かっていた。その表情は若干の嬉しさを含んでいた。

「あ、おはよう姫也さん」

「…………おはよう」

仏頂面だが相手は気にすることもなく姫也に笑いかけてくれてい

た。だが、まだ少し恥ずかしいのか少し頬を赤く染めていてそれを見るたびに姫也の頬にも朱が差すのだった。

「今日も早いのな?」

そういうつて相手が持つていた本を覗き込む。そこには筋肉質の男達がすらりと並んで覗き込んだ姫也に白い歯を向けてくれていた。

姫也はぶるつと身震いすると相手……阿佐喜多理穂あさきたりほに視線を向けた。眼鏡をついとあげると見ていたマッヂョに笑みを浮かべる。

「どうです? まっちょさんたち」

「…………嫌い」

「あ、そういうえば姫也さんはお嫌いなんでしたよね? すばらしいですか…………やはり、お嫌いなんですね?」

「うん、嫌いだ」

姫也は男が嫌いだつた。

変な意味ではない。

男は実際に暴力的だと実感しているし、姫也の頭脳には父親が酒を飲んで子どもを虐待するシーンが強烈に映るときがあった。

今のお父親は変な人だが優しいと姫也は思つてゐるが前の父親は……それと、こここの男子どもは姫也の何が気に入らないのかわからないうがことあることに茶髪の不良とかが自分に難癖をつけてくるのだ……先生にばれないように撃退しているが困つたものだと姫也自身思つてゐた。男子の中にも確かに優しい奴も何人かいるがやはり、女子のほうがいいと思うのだが姫也のことを怖がつたり、姫也自身女子とどうやって接していいか(もっとも、男子ともどもだが)わからなかつたので未だに友人の数は少なかつた。

「でも、根は素直ですからお友達、たくさんできますよ」

「もう、充分いるから」

「へえ、そなんですか?」

「うん、えつと…………三人?」

「少ないな、阿佐喜多はそう思つたがもしかしたら……」

「わたしをはずして?」

「阿佐喜多を入れて」

「……あはは」

阿佐喜多も友人が少ないほうだが6人ぐらいはいる。

「友達百人目指しますか?」

「百人もいたら阿佐喜多とかと話す時間が少なくならないか?」

「あ、それもそうですね。なら、まつちよさんを友達にしましょう」

「いや、俺筋肉系苦手だから」

そういうて二人で話しているとがらりと教室のドアが開いた。すぐに対応して姫也はぱっと離れて自分の席に座った。

「おいおい、ぼくだよ、ぼく」

知り合いだったことに気がつくとため息を一つついて姫也は言った。

「アホ、いつぺん夜空に輝けよ」

「うつわ、相変わらずロマンチストだねえ~」

そういうて入ってきたのは阿佐喜多理穂の双子の妹、阿佐喜多理子だった。髪の毛を一つに縛っている姉とは違つて短めに切つていて男の子っぽい仕草だった。この人物も舞と同じで女子に大人気である。

「で、姫也クンはぼくの姉さんにちよつかいを出してビーッする気だつた?」

「アホには関係ない」

出す氣だつたのかしら?と理穂は思ったのだがあんまり物事を深く考えない姫也はまつすぐな視線を向けていた。

「知つていたかい?アホ……ちなみに亞父と書くと中國では父に次ぐ尊敬する人つて意味になるんだよ?」

「しらなかつた……じゃあ、馬鹿」

「君が?」

そういうわれて姫也はもう言ひ合ひをすることなくごぶしを握つて走つていっていた

「ほんにやる！」

そういうつて本気で相手の顔面に拳を叩きつけようとするが相手は残像を残してそれを避けた。

「！？」

「遅いよ」

毎度毎度残像の原理をどうにかして見破つてやるつと想つていた姫也だったが一度も成功することもなく、今日も背後を取られておもちゃの銃を突きつけられていた。

「くう！」

「その悔しい顔！たまらないねえ！ぼくは興奮しそうだよー。」

姫也はよかつた、こいつが男じやなくて……男にそんなことを言われたらどうにかなつちまうやうだと懲りのつた。

「姫也、あんたいつか絶対に騙されるわ

「誰に？お前に？」

その言葉にカチンと来たのだがどうせ不毛な争いに終わるのだと舞は思つて拳を下げる。既に辺りは真っ暗であつた。普段だったらここまで遅い時間帯に帰ることはないのだが担任の呼び出しを姫也が珍しく無視をしたのが原因だった。本日、担任の機嫌は非常に悪く無視したのも含めて姫也はずつと怒られていたのである。

「で、何で素直に行かなかつたの？愚直なあんたにしては珍しいじゃない？」

「…………だつて、お前が先生を操つて放送をさせてるつて理子が言つてたぞ？」

「信じたの？」

「勿論だ。呼び出しに応じた場合はキッコーマン縛り？かなんかにして楽しむとかそんなことを言つっていた

「…………はあ

あのアホめ…………大体それは亀甲縛りだろ？舞はそんなことを思い、姫也はキッコーマン縛りつて何だと素直に考えていた。

そのとき、電気の消えていた一つの家から物音がした。

「き、」

舞が悲鳴を叫ぶよりも早く姫也は舞にしがみついており、舞の豊かな胸に顔をうずめてぶるぶる震えていたのだつた。

「ちょ、ちょっと、大丈夫だつて！ 何もいなゐわよ！ それに、こんなところで何してるのよ！」

いつもこんな感じなのが舞には充分恥ずかしかつた。暗いところで物音がするともう駄目。姫也は必要以上に怖がつて最後には気絶してしまう…………それだけでは終わらず姫也の夢の中にまでその何かは追つてくるのである。

「ほら、もう、大丈夫だから、よしよし」

私は姉か？ 姫也の姉なのか？ と考えながら頭を撫でる。いや、もしかしたら飼い主の可能性も……

頭の中で姫也に首輪をつけて鎖を握っている自分を想像しながら少しだけ舞はふきだしていった。

少しだけ舞はふきだしていった。

「ほ、本当？」

「うつ！」

姫也が物凄く幼い顔に戻る瞬間がこのときだらう。このときの表情が一番舞には至福の時に思えるほどだつた。

姫也は顔を注意深く上げて辺りを見渡すと仮面に戻つて何事も無かつたかのように歩き出した。

「おいおいおい！ 私の胸にいきなり顔をうずめておいて礼の一つもないの？ このスケベ！」

「スケベ？ 誰が？」

「あんた！ あんたよ、姫也」

舞がそういうと姫也は近くの電柱に静かに近づいていった。

「？」

さて、これから何を始める気だ？ フライングボディーコロスチョップか？ と舞が面白そうに見ていると固定されている電柱をさらに

固定するかのように両手で挟むと……なんど、自分の頭を打ちつけ始めたのだつた。

「起きろ、起きろ、起きろ、起きろ……！」

「ちょ、ちょ、とーーこは現実よ！ 現実！」

「…………夢じやないのか？」

「そうよ、現実！ あんたは私の胸に顔、うずめていたの！」

今までだつてそうしてきました……といつても、姫也のことをスケベとは言つていなかつた。だが、今田はたまたま舞が少し深く見てみただけだつたのだが、これはすゞい光景を見たものだと彼女は思つていた。

「本当か？」

「本当よー。」

胸を張つていった舞を見て姫也は顔をそらした。それに対しても舞はにやつとすると再び言つた。

「あ、また何か意識してない？」のむつりスケベ

「…………むつりスケベ？ 誰が？」

「あんた！ あんたよ、姫也…………ん？ むつもじんなやり取りを

……」

電柱を掴み、姫也は再びぶつけ始めた。

「記憶消えろ！ 記憶消えろ！ 記憶消えろお……」

「う、ごめん！ もう気にしなくていいから！ ストッップ！」

むつりスケベだつて否定はしないのね……と思つまもなく舞は頭を打ち付ける姫也を止めに入つたのだつた。

風呂上り、辰子はたまたま姫也の前を通つて牛乳を取りにいつてのことである。

「…………ならかな草原だなあ」

「馬鹿兄貴、喧嘩売つてるの？」

芝生が敷かれているところの『眞を持つて辰子を見る姫也。そし

て、その姫也を睨みつける辰子。

「いや、なんでお前に？」

完璧に確信犯の表情をしている姫也の顔面にけりがはいつた。悔しそうに辰子は牛乳をワンパック飲み干してもだえている自分の兄に言つのだつた。

「このスケベが！」

ぴたりと姫也の動きが止まって壊れたロボットのよひに辰子のほうに視線を向けるのだつた。

「スケベって……誰が？」

姫也はようよると立ち上がり辰子に尋ねる。

「馬鹿兄貴よ！ 馬鹿兄貴！ 黒羽姫也に言つてるのー！」  
ふらふらと歩いていつて壁に両手をつける。

「？ 何してるの？」

何かのオマジナイでも始めるのかと思つた辰子だったが……

「謝れ！ 謝れ！ 謝れ！」

「ちょ、ちょっとなにしてるのー？ 誰に謝るのよ？」

そういつて頭を打ちつけ始めた姫也に仰天するのだつた。

ところ変わつてお隣の舞の家。

「……辰子ちゃん押しちゃつたな」

自分が初めて何か姫也の押してはいけないスイッチを押してしまつたのだろうと罪悪感にさいなまされたが、まあ、敏感に反応する姫也が面白いとも思つたものだつた。隣から同じ音程で聞こえてくる「ゴシゴシゴシ」という音を聞くのも意外と面白かったのかもしれない。

そしてとにかく変わって黒羽家。

「はあ……はあ……一体、どうしたのよ」

「……」

壁に向かつて体育座りをしている姫也に話しかけるが彼は何かぶ

つぶつ言つているのだった。

「まったく、舞先輩ねこれは…………」

また押してはいけないスイッチをあの人は勝手に押したのだろう。体はやたらと頑丈なくせに精神面ではとてももういのだ、この兄貴は。つつけば割れる、そんな存在。だけど、辰子は姫也がこういった人騒動の後に言つてくれる一つの言葉が好きだった。

「辰子、その、何だ……悪い、妹だからって失礼な」と言つて

姫也はそれを絶対にいわないといけないと思つてゐる言葉で妹に對しての甘えだと感じていたし、また逆に辰子は自分のことをちやんと妹と思つてくれている姫也にこれまたかけがえの無い嬉しさを感じるのだった。

「小さいとか、いつちまつてさ」

「馬鹿兄貴は……兄さんは、小さいの嫌い？」

「え？いや、別に」

とりあえず、ほつと一つため息をついていたずらっぽく辰子は笑つたのだった。

「……このえっち」

そして、彼女はいつてあせつた。

「……それ俺のこと、だよな？」

ふらふら～と階段を駆け上がりつて窓を勢いよく開けて……

「うわああ！！！ストップ！兄貴ストップ！悪かつたつて……」

姫也はただただ、身を乗り出さうとするのだった。

ピンポーン！

「「ん？」」

既に夕食も食べ終わつた時間に誰かがやつてくることなど皆無だつたのだが、誰かがやつてきたようだ。チャイムの音を姫也は半分体を外に出しながら、辰子はそれを抑える形で聞いていたのだった。

「誰だ？」

「さあ…………行つてみないと…………」

姫也よりも先に辰子が階段を降りて玄関へと向かう。しばしの間姫也は一階からボーッと外を見ていた。いつものようにひびこめているような闇があつた。

「あいたつ！！」

ボーッとしていた姫也の顔に何かがあたり、反射的にそちらの方を見るといやいやした顔の舞が手を振つていた。

「あんにゃひー待つてろよ！」

それだけいと一階の窓から身を乗り出して……

ひゅーん！ぐぢゅっ！！

そんな音が夜空に響いたのだった。

全治一ヶ月の骨折だった。

「…………」

ベッドの上で右足が吊られているのをボーッとみながら姫也は考え込んでいた。ギブスには舞がマジックでかでかと『僕はスケベです』と書いており、それは姫也に絶対みれないように足の裏部分に書かれていた。

「…………暇だな」

いかにしてこの暇な時間を過ごすかと思つていたのだがとくにすることがなかつた。

今のは学校がまだ授業をあと一時間は行つてゐる時間だらうとする時間がなかつた。

今のは学校がまだ授業をあと一時間は行つてゐる時間だらうしてテレビも面白いものがあつてない。両親に電話をかけようと思ったのだが先ほどかけてあの変わった自分の両親達はただいま盗掘の疑いをかけられて海外を逃げ回つてゐるらしいと彼らの仲間に聞いてスケールが違うなと姫也は思つたのだった。

「あ、やつと見つけました……はじめまして姫也様」

「暇だな」

寝返りをうつことなく天井を見ていた姫也。

「もう、無視しないでくださいよ、姫也様」

「…………」

心なしか見たこともない謎の少女が黒いローブをまとって誰もない相部屋のベッドの上でこちらに微笑みかけていた。だが、これは死神の類か何かではないだろうかと姫也は思っていたので徹底無視を決め込んでいた。相手はベッドから降りて姫也の足側に歩いていった。

「…………『僕はスケベです…………？姫也様ってスケベだったんですねか？』

「…………」

どこかで再びこれは夢なのだと聞かせるために動こうとしたのだが、あいにく足に痛みが走って動くことも叶わず仕方がないので静かに目を瞑つて相手に告げた。

「…………殺せよ」

「あの、前の台詞とつながつていませんよ？」

相手は人のよさそうな顔で疑問符を頭に出すのだった。

「あんた、死神なんだろ？足の怪我で殺すなんてどういう神経しているかわからんがやるならやれよ」

「何か勘違いなさつてますね…………」

「ホント、相手は一つ咳払いをして未だに目を閉じている姫也に告げたのだった。

「…………リティシアは姫也様をお助けにきた騎士です」

「…………」

姫也是黙りこくるしかなかつた。騎士？騎士つて何だ？弱氣をくじくようなあれか？うーん、よくわからん。

「騎士免許ゴーリドです」

「いや、言われてもわかんないから」

そういうて相手を視界の外にしようと思つたのだがすぐさま相手は視界の中に入つてくる。

「…………あのや、俺、今から眠るんだけど?」

「あ、そうでしたか…………それは失礼しました」

「そういうて相手は姿を消した。

『それでは、また後ほど会いましょうー。』

『そういうて声も聞こえずじまい…………』

「…………なんだつたんだ?」

首を傾げるがそのまま田をつぶることにした。

結果、次は物凄く死神っぽい奴がやつてきてはいたのだが…………  
所詮は夢の話だった。

「よ、おはよ

「…………舞か」

既に夕日が窓から差し込んでいて隣のベッドを照らしていた。舞  
はマジックを持つて一生懸命何かを書き込んでいる。

「…………何してんだよ?」

「ひ・み・つ

「…………と笑つて再び何かし始める。まつたく、またじうせ何か落  
書きだらうよと姫也は不機嫌そうに田を開じたのだった。

「あのや、――こ来る途中で黒いローブを纏つたこう、綺麗なお姉さ  
んがいなかつたか?」

「?　いや、会わなかつたわ…………何?　その人誰?」

興味を持たせてしまつたことに若干しまつたと思いながらも姫也  
は正直に言おうかやめるべきか悩み…………

「はい、黒羽さん先生が呼んでますよ

「あ…………」

やつてきた看護士さんみて姫也はそう呟いた。その相手の顔こそがあのローブを纏つていた人だつたからである。

「舞、こんな顔だつた」

「こんな顔つて……看護士さんじゃないの?ほら、早く行つてきなさいよ。私は帰るからね」

それじゃあねとだけいつて舞は帰つてしまつた。車椅子を持つてきていた看護士さんにも挨拶をして去つていった。

「…………」

黙りこんだ姫也のほうへ顔を近づけて看護士さんは告げた。

「…………駄目じゃないですか、喋っちゃ…………姫也様、おしゃべりなんですね?」

「やつぱあんた…………」

喋るうとする姫也の口を人差し指でしーっと静かにするよつじジエスチャーで告げると相手は静かに言った。

「リディシアです、リ・デ・イ・シ・ア」

「…………リディシア、あんた一体何なんだ?」

「…………だから、騎士ですって」

やつじでベッドの上で寝ている姫也に覆いかぶさるよつじしてくるリディシア。頭の中がいつぺんにピンクに染まつていぐ姫也。

「ほら、早くたつてください」

「え?ああ…………」

リディシアはただ単に姫也が起きなかつたのでおじやうとしただけであつた。

「あの、姫也様?」

「何?」

「そちひのまつを…………その、たたせろといつたわけではないのですか?」

「…………」

下半身のまつをひりひり見ながらトイシアが顔を真つ赤に染めながら告げる。

ただただ、姫也は顔から煙を出し続けるだけだった。

「なあ、屋上に先生はいないだろ?」

屋上へと向かうエレベーターに乗せられて姫也はにこやかに笑つているリディシアにそうこつた。

「いえ、こますよ」

てつきり一服中なのかと姫也は思つたのだが、屋上について相手を見てから固まつた。

「よおこそー姫也君ー!」

そこにいたのは白衣を真つ黒に染めた黒衣を纏つた頭が白髪で爆発していくぐるぐる眼鏡をかけた初老の男性だつた。

「おや?どうした?」

「…………リディシア、誰、この人?」

「私を作つてくれた製作者、ツインツイン・イクシテです」

「ちんち……え? もつかいいつて」

「ツインツイン・イクシテ」

「…………そう、で、その…………ツインツインさんが何ですか?」

姫也は見るからに怪しそうな黒衣の男を注意深く、また、いま自分の後ろにいるリディシアのことも警戒しながら話を続けさせることにした。

「そんなに恐れなくていい!私は何も君を傷つけようとは思つていない……」

「…………信じられませんが?」

まあ、確かにそうですね…………怪しいですからリディシアがいつたので相手はしばし考えた後にリディシアに告げた。

「…………じゃ、リディシアが伝えてくれ。私はそこで夕焼けでも眺めてるから」

そういうてへこんでしまつたのか夕焼けを見ながら袖で涙を拭いているようだつた。

「…………え?、コホン、ではリディシアから説明させていただきますね」

「え?ああ……」

そういうてツインツインの隣まで車椅子を押していき、夕焼けを同じようにリーディシアは眺めた。

「……結構前の話です。この世界には対極の存在が必ず存在しています。筆頭に上げられるのが光と闇。古来から光は闇から生まれた、その逆であるとも言われています。今だつてそうです。……そして、リディシアたちは光の領域に闇が光を闇に変えるために侵入してきた場合はその闇を撃退、もしくは消滅させてきました。……」

「これまた突拍子もない話だと姫也は思っていた。そのまま黙つていると再びリーディシアは話を始める。

「……逆に光が闇の領域に行けば闇の騎士が光を消滅、または撃退しています。光は光の領域、闇は闇の領域をずっと守つてきているのです。ですが、作られた存在の騎士達はどうちらのほうにも染まりやすくあまり安定した存在ではないのです。……」

そこまでリーディシアがいうと復活したのかツインツインが話を続けはじめた。

「だから我々は協力者を探してあるのだ」

「協力者？俺？」

「ああ、そうだ」

一つ書類を取り出して姫也に見せる。そこには

『契約書 この書類にサインすることによって起こる非日常的な世界のことを私は絶対に日常に住む人々に喋らないと誓います。』  
そんなことが書かれていた。

「……俺にサインをしろと？」

「ああ、そうだ……それ以前に……このリーディシア……番号99は安定しておらず闇の攻撃にはもはや耐えうるほどの力量を持つていな。誰かがこの子の協力者とならない限り次の戦闘で必ずリディシアは破壊される」

姫也はリーディシアの方を見たが彼女はそっぽを向いていい夕日ですねと呟いただけだった。

「……まだ全然話なんてしたことなかったのに……そんなこと

をいわれたつて俺は困る……」

「ああ、困るのは百も承知……だが、私の見解でいわせてもうえ、ば

「

ツインツインはそういつてボールペンを一本取り出した。

「……君はこの手の話に弱い、困つた人を見捨てるとは出来ない性格と思うが……どうだね?」

「……」

差し出されたボールペンを姫也は奪い去るように手にとつて乱雑な字で黒羽姫也とその書類に書いたのだった。嘘だとしても、そのときは笑い飛ばせばいいだけだと姫也はおもっていたからだ。

その瞬間、書類は燃え始めて驚いた姫也はそれを放した。

「……一体全体……」

「ふふっ、驚くのも無理ないな……」

「……で、俺はこれから何を協力してやればいいんだ?」

そういうつてツインツインを見た後に後ろのリーディシアを見る……だがそこに彼女の姿はなかつた。

「リディシアは?」

「ああ、多分我々の基地に転送されたんだろうな……彼女が戻つてくる前に詳しく闇について教えておこうと思つ」

ツインツインはそういうつていくつかの写真を取り出した。そこには映るのは闇をさらに凝縮したような暗闇の塊のようなものだった。人型、獣型、ただ丸い何か……目も鼻もなければ凹凸とかは感じられず平面の世界……と思われる者達だつた。

「これが闇?」

「ああ、まだこっちに来てまもない闇……一年過ぎると……」

次に渡された写真にはどこにでもいそうな人が写つていた……だが、その写真に写つていて陰はつじめいていて写真だというのに動かないものではなかつた。

「……」

「気がつけばこの世界に順応してる連中。別に危ないわけじゃない

がとりあえず普通の生活をしている連中だからほつと/or。我々としても実に興味深いと思つてゐる」

一枚の写真が落ちそうになり、それを姫也が握る。

「…………」

そこには闇の住人だと思われる綺麗な女性が目の前のツインツインと一緒に酒を飲んでへべれけ状態になつてゐる姿が映つていた。

「…………こほん」

その写真をすばやく奪うとツインツインは続けた。

「とりあえず、時間が過ぎるごとに闇は力を増していく。でも、基本的に闇にすんでいる連中も我々と同じようなものだ。罪を犯すものだつているし、それを裁く者達だつている。リディシア…………彼女達を作り上げた技術だつて光と闇の技術が半分ずつ入つてゐる」「…………リディシアたち…………あんた達が騎士つて呼んでる存在つて一体なんだ？」

「忘れていたな、それを先に説明するべきだつたかもしだい」  
再び写真を取り出してそれを姫也に見せる。

「…………？」

ピンボケしててまつたくわからなかつた。

「これは？」

「彼女達は人工的に作られた。だが、人造人間とかそんなものじゃない。人の心を力にし、力をくれる自分の相棒のために戦う者達さ……絶大的な力に屈することもなく、守るもののために闘うこととを悩まない者達だから騎士つて呼ばれてるのさ」

「…………守るために闘うつて…………」

その力は暴力なのだろうかとふとを考えた。

「作られてすぐは精神的不安定状態をずっと続けてゐるが、信頼できる相手を一人だけ見つけるとその人を守り、戦い抜く…………そんな者達だ。我々は直接的に闇と戦う力を有しておらず、騎士が信頼する相手に協力してもらつて闇を撃退してゐる。確かに我々は彼女達を作つたがそれだけで彼女達は我々のために戦つてはくれないの

さ…………信頼できるものが見つからず闘い続けた場合は…………闇を滅ぼすために闇の世界に一人で突き進み、あちらの騎士に排除されてしまう運命」

つまり、自分がリーディシアの協力者にならない限り彼女は排除されていたことになっていたのだろうと姫也は安易に想像することができた。

「一体、闇はどこから来るんだ？」

首をかしげる姫也にツインツインは静かに言つた。

「…………そこだ、人は誰だって入り口を持つてるものさ」

そういうて指差したのは姫也の陰だった。

「…………」

自分の陰を姫也が見ていてツインツインの携帯が鳴り、それをツインツインが一つ、二つ返事をして姫也にいつた。

「…………もう少しでリーディシアが来るそうだ…………その前に一つ、面白い話をしてあげよう」

「…………どんな？」

「我々が光と呼んでいる世界は白い闇だと誰かが言つたんだ。大抵の人は笑い飛ばした。あちらが闇ならこちらは光だ。コインに裏と表があるのなら我々は表だと皆はいつた…………だが、そいつは何故、我々が表であると言い切れるのだと尋ねた。あちらが闇ならこちらは光しかないだろうと皆はいつた…………そいつは死ぬまで自分の言つたことを曲げることはなかつたんだ…………それで…………」

ツインツインは話を続けようとしたのだがそこでふと、空を見上げた。

「…………来たようだな」

「え？」

ツインツインが見上げたほうを姫也も見上げたのだが、何かが目の前に落ちてきた。それはどすんという音とともに姫也の目の前に、足先から五センチほどのところに舞い降りたのだった。

「…………あいたたた…………」

しりもちをついていたリティシアは先ほどのような看護師の服装ではなかつた。黒塗りの西洋鎧のオープンフェイスの兜に胸当て、丸っこい肩、小手、具足をつけていて腰には長剣、拳銃、背中にはマントがつけられていた。

「…………確かに騎士だ」

「これが初期装備ですよ、姫也様。リティシアたちが闇を撃退すればするほど強い装備がもらえるんです！がんばりましょう！」

一人でえいえいおーをしているリティシアを見て姫也はしかめつ面になり、そんな姫也にツインツインはささやいた。

「…………消滅させた闇はこの世界に降り注ぎ、何かに生まれ変わる。そうだな、消滅させたときの姿をもつとして再び光の住人となるといつていいだろ？…………だが、彼女達は違う。彼女達がこの世界に再び現れることなどなく、あちらの世界に生まれることもない。彼女達が破壊されてしまつたらどうなるか…………それはわからないまあ、我々人間も同じなんだがな…………」

「…………がんばります」

姫也はそういうあとにツインツインにいつた。

「…………リティシアって騎士免許『ゴールド？』

「ん？いや、剥奪中」

いまだベットの上で暇そうにしている姫也の隣では看護師の格好をしているリティシアがりんごをむいていた。外は既に闇が支配していて人工の光だけが輝いている。いつもは夜空に輝いている月も今日は雲が主役のようで顔を見せてはいなかつた。

「…………」

しゃりしゃりしゃりしゃり…………

「あのさ、人つて簡単に他人を信用できるものなのかな？」

「さあ？それはその人によつて違うのではないんでしょうか？」

リティシアはそれだけいうと再びりんごの皮をむき始めた。

「そうだよな、口だけじゃなんどでもいえるもんな」

「よろしいのですか？あの少年を協力者にしてしまつて？」

「一人の学生がそんなことをツインツインに尋ねていた。

「ん？何故だい？」

「番号99との……いえ、騎士自体との適応値は〇です。それにぼくがみたところあの二人のどちらかはパートナーを信頼していいようですよ？」

ツインツインはそんなことを言つて居る相手にふつと笑つて言つたのだった。

「まあ、当然の結果だな……人は自分のために行動してくれる人間を初めて信用するという話も聞く。人間は口ではなんとでも言えるものや……闇に襲われるのは彼カリディシアか……君はどうちだと思う？」

問い合わせられた学生……阿佐喜多理子は静かに笑つた。

「……ぼくは友人が傷つく姿なんて見たくありませんから勿論9番が闇に襲われて欲しいと思つてます……もつとも、姉さんだったらわかりませんけどね」

それだけいうと静かに闇の中に消える。

静かな部屋に扉が閉まる音だけがひびいたのだった。

「……まあ、これからが楽しみだな。早くて今日の夜、遅くて明日の夜……か」

「暇だ」

足のギブスにはリディシアが色々と落書きをしていて白い部分がほぼ真っ黒になりかけだった。

「あのせ、リディシア……」

「なんですか？姫也様？」

「……闇つてどこから来るんだ？」

「あれ？聞いていませんでした？」

マジックのキャップを閉めて定位置となつた近くの椅子に腰掛け

て彼女は言った。

「……主に陰からです。例外として人の心から出てきたところの話も聞いてます」

「人の心から?」

「ええ、負の念……とでもいいますか? そういうたものをずっともつていた人があちらの世界の人の誰かと共に鳴したとき、あちらとこちらに同時に現れます。そういうときはあちらの世界とこちらの騎士が協力しないと倒せないんです……まあ、今まで出てきたことは一回、二回ぐらいですから気にしなくて結構です……それで、陰から現れた闇を再び陰に押し込むか消滅させる」とよってお仕事は終了となります。わかりましたか?」

「……まあ、わかった」

未だに信じられない気持ちのほうが大きかつたが現にリディシアはこうやって存在しているし昨日剣等に触らせてもらつたがどう見ても本物だった。

「いつ来るとかわかるのか?」

「さあ……それはちょっと今のリディシアにはわかりませんねえ……」

そういうでどこからともなくりんごを取り出して再びむき始める時刻は夕刻、そろそろ学校が終わって誰かがやつてくる時間に近づいていた。

「馬鹿兄貴、元気?」

今日は辰子がやつてきたようその手には若干汚れていたタンポポが握られていた。

「……辰子、何だそれ?」

「お見舞いのお花よ! これでいいでしょ、別に! 明日の晩ぐらいいはかえつてくるんだし!」

そういうで近くの花瓶にタンポポをさす。そこでよしあくリディシアのことが曰こはいったよで驚いたよな表情の後すぐに頭を下げる。

「兄がお世話になつてます」

「いえいえ、こちらこそ…………」

「こいつと笑つてリディシアも頭を下げる。

「お邪魔ですね…………それでは姫、……いえ、黒絲をさびついだりゅうひ  
くつと…………」

そういうじょうづに切られたりんごをさらに載せてリディシア  
は去つていったのだった。

「あの人りんごむいてもらつてたの?」

「ん~?」

もとはリディシアが勝手にむいて行つた物だつたのだがそつだと  
いうのも怪しまれる可能性があるので頷いておくことにした。

「……まあ、りんごが食べたかったから」

「えーと、まだ、りんごいる?」

昨日からずつとりんごしか食べていないような気がしてならない

姫也としてはもうこいつぱいといつぱいだった。

「いや、りんごは遠慮しとく……持つてきたんだろ?」

「あ、わかつてたか…………」

後ろに隠すようにしていた紙袋からりんごが出てくる…………中途  
半端におせつかいな辰子のことだ、どうせこちらから言い出さなか  
つたらそのままもつてかえつて腐らせるだけだらうと姫也には簡単  
に想像できていた。

「けど、この前來たときあんな看護士さんほみたこと無かつた氣  
がするんだけどなあ…………」

「そりや、バイトだろ? もしくは新しく入つた新人とかね…………」

「ま、もついいけどね…………あ、そういうえば今日学校でね…………」

久しぶりに訪れた気がした会話に姫也は苦笑しながらも、妹から  
つっこまれながらもひと時の安らぎを得たのだった。

「ツインツイン様、わたしは反対です」

「…………やはり君もか?」

夕焼けが窓から差し込んでくるのをまぶしそうに眺めながらツイ

ンツインは抗議してきた阿佐喜多理穂を見る。

「君の……妹もそんなことを言っていたような感じだった……

言葉には出してなかつたと思うけどね」

「番号99……リディシアはまだ以前のパートナーのことを気に

かけすぎじゃないですか？早すぎます」

「しようがないだろ？次でリディシアの命運が決まる

「どうしても！姫也さんは適応値0の一般人です！わたし達とは違  
います！彼には普通の人生が待つてたはずなんですよ？」

まくし立てた理穂にツインツインは静かに言った。

「…………待つてたは過去形だ。君にだつてわかつてるはずだ……

もう時計の針は戻せない……」

そういうて時計を見せて自分で針を戻すツインツインに理穂は血  
が頭に昇るのを感じていた。

「話になりませんっ！！」

どんと机を叩いて退出していく。

「…………さて、あの一人の命運はどうなるんだらうか……私は硬  
貨一枚、リディシアにのせよう」

そういうてリディシアと書かれた紙の上に硬貨がまた一枚、のせ  
られる。信用していないのはどちらか…………ここではそれだけが最  
近の話題だった。作成者側は騎士の存在を重く見ていて全員がリデ  
ィシア……姫也の上には三枚のコインだけがのつていた。

「…………阿佐喜多姉妹……おや？あと一枚は……」

その硬貨を手にとつてツインツインはしばし眺めた後に自分の硬  
貨を姫也と書かれた名前の上にのせた。

「…………まさか、な」

「じゃ、あたしは帰るから」

「ああ、襲われないように気をつけてな」

「まあ、兄貴の足が治つてたら兄貴を警戒してないといけないけど

「…………」

「わー！嘘！嘘だからー！」「3階！」

飛び降りようとする姫也を止めて辰子は病院から出よつとしたところでリディシアに再びあつことになった。

「あら？ 今おかえりですか？」

「あ、はい！ えつと、兄貴のことを宜しくお願ひしますね」

「ええ、任せください」

そんな義務的な声を聞いて少しだけ残念そつな気持ちになつた辰子だったが再び頭を下げて今度こそ病院を出た。

「…………」

あの兄には心から接してくれる人ではないといけないのだ。義務的で守るとか、損得勘定で兄の近くにいてもらつのは困るのである……たとえ公共の機関だったとしても出来れば特別に扱つてもらいたかった。

「？」

ふと、近くの陰がづくめいたような気がしたが辰子は氣のせいだうと思つて帰り道を一人で自転車に乗つて帰り始めたのだった。

「…………変な感じだな」

静かな夜なのだが一切人の気配がしていなかつた。首をかしげる姫也のもとへリディシアがやつてきて告げる。

「闇が、来ましたよ姫也様」

その姿は既に戦闘準備万端といったところだらうか？ 顔は緊張する」とも無く無表情だった。

「…………これが？」

「ええ、今は屋上で姿を形成中です……数は一體、急ぎまじゅう！」

「…………ああ」

こよいよだと姫也は自分に言い聞かせてリディシアとともに屋上

へと向かう…………

リティシアはゆつくりだが存在感の感じさせる感じで階段を上る。

「エレベーターは？」

「使用できません」

階段の通り場から見える部屋の扉は当然ながら全て閉められたがそれ以前に人の気配を一切感じなかつた。

「他の人はいないのか？」

「いるにはいますがもうお互に干渉できる存在ではありません……えっと、そうですね、例えとしてはお互に認識できないといつたらわかるでしょうか？」

つまり、巻き込むことは無いようだと姫也は知つた。

「…………あのさ、俺が屋上に行くメリットは？」

「出来るだけ近くにいてくださればその分リティシアは強くなれると思います」

「ふうん…………」

電波塔みたいな感じかな?と姫也は呟いて前を見る。既に目の前には屋上の寂れた扉が迫つっていた。

「いきますよ！」

「…………ああ」

その声がなんだか姫也以外の誰かに言つていたように感じられた姫也は一瞬だけ返事がおくれたのだった。

目の前にはただ、闇があつた。

「…………ランクA以上!/?嘘!こんな装備じゃ勝てません!」「…………」

はじめて見る闇の姿に姫也はただただ呆然と立ちすくむしか出来なかつた。その闇は人型をしていたが写真で見たように人間の顔をしておらずただ、黒く開けられた目鼻が作られていて口の部分にはさらに闇を濃縮したような暗闇が広がつていた。

闇が、静かにそんな二人に嗤いかけた。

ドンドン!!

「！？」

姫也の隣では既にリディシアが拳銃を撃っていた……が、相手に当たつていたとしてもそれは闇の中に消えていくようで攻撃しても意味がないと詳しく知らない姫也でさえわかつていた。相手は面白そうに嗤っていた。

「リディシア！」

「え？」

姫也が叫んだときには遅く、目の前の闇はリディシアに突撃しておりどんっという鈍い音とともにリディシアは屋上の扉に叩きつけられていた。

「うはっ…………」

膝をついて動かないリディシアをどのようにみているのだろうか？嗤つて？蔑んで？無表情で？ととりあえず姫也には次の一撃でリディシアを破壊しようとしているよつとしに思えた。

だから、リディシアを助けるために姫也は動いた。

敵わないとは初めからわかつていた。

リディシアをとりあえず相手の攻撃の範囲から遠ざけるために……

闇の振り上げた右腕が突き刺さった先にいたのは……

姫也だった。

「「！？」」

自分の体を貫通した闇の右腕をまじまじと眺める姫也……そしてそれを下から驚いたような、死んだような眼で見つめているリディシア……もしも、そのときちゃんとした表情を出来るのなら一番驚いていたのは闇のほうだったかもしない。

「リディ……がほつ！」

血の味ではなく嫌な何か……それが口から吐き出されリディシアにかかる。それは濃縮された闇だった。

そのまま姫也はその場に崩れ落ち、リディシアはそれを呆然として見つめていた。闇の存在は消えていた。体が覚えていたのだろうか？リディシアは左手で剣を握り闇をさしていったのだから。

「一体撃破です……が、姉さん、99が動いてないよ！姫也クンもあれから動かない！」

珍しくあせつたような調子で理子は姉にそう告げると白銀の鎧を纏っていた姉、理子は絶望的な表情を無表情に変えて妹に告げる。「残りはわしたちで片付けるよ、理子」

「おつけ、姉さん！」

上から奇襲をかけようとしていた闇にリディシアが握っていたものとまつたく同じ拳銃が発砲する。

断末魔の叫びをあげること無く闇は静かに消え、理穂が瞬きを一回下後には既にいつもの空が、屋上がそこには広がっていた。

「……信頼できなきやどんな武器使つても一緒なのに……姫也さん、大丈夫かな……」

近づきたい衝動を抑え、そして、リディシアへと向けられた拳銃の銃口を下ろして屋上のフェンスに手をかける。

「いいの？行かなくて？」

「……大丈夫、あさってにはいつもの時間に来てくれるだらうから

それだけいつて一度と倒れている姫也を見る事無く理穂は飛び降りる。

「……そうだね、ぼくもそう思うよ

続いて理子も姉に続いたのだった。

田の前には倒れたまま動かぬ姫也の体があり、手を伸ばせば触れ

れるところまできていた。だが、いつかのようにな動かぬ人に、冷たくなった人に、あちらの世界に行つてしまつた人に触りたくないという気持ちがあつた。

だが、一つだけいわなくてはいけないことがあつた。

「…………みません、姫也さま…………すみませんでした！」

そういうて触れる…………と、その手を温かい人の手が握り締める。

「あいたた…………ん？あれ？」

姫也は貫通していたはずの部分に自分の手を持つていくが穴など開いてなく、また口から何か出たような気もしたが何もついていかつた。

「？」

首をかしげる姫也にリディシアは飛びついでいた。

「姫也様！すみませんでしたあ…………リディシアは…………リディシアは姫也様のことをパートナーだつて一切思つていませんでしたあ…………でもまさか、あのような行動に出るとは…………」

「ちょっと、重い！」

そんな騒ぎをしている間、姫也の陰が蠢いていること――人は当然気がつくことは無かつたのだった。

「賭けはやはり、こちらの勝ちだな」

「師匠、まさか鞍替えするとは思つていませんでしたよ！製作者一同、怒つてます！」

「ふふっ、すまんな」

そういうて姫也と書かれている名前のほうにリディシアと書かれた名前のうえにあつた硬貨が全て移動させよつとする。移動させる前にふと、ツインツインはその手を止めた。

「…………消えてるな？」

「え？何がですか？」

「ここにあつた硬貨。私のを含めて四枚だつただろう？」

「いえ、三枚でした。あのいけ好かない姉妹と師匠のものです」

「……………そつかそれならいいんだ……さてと、これで好きだけ趣味につき込めるな」

「あ、本当にずるいですよ～」

そんなやり取りが裏では行われていたのだった。

「…………リディシア、ここは?」

「…………闇との戦いで破壊された騎士達の墓場です…………誰かがつ

くつたそんなんですけど粗雑で名前なんてありませんけどね」

終わつてすぐ、リディシアにおんぶされて姫也はある会社の屋上に連れて行かれた。一人の手には花束が握られている。

献花してリディシアは呟いた。

「…………一年ぐらい前…………リディシアは以前のパートナーを失いました」

その表情は苦悶に満ちていて姫也は続きをいおうとしたリディシアの口前に手を持つてくる。

「待つた、俺はもう聞かなくていい」

「…………でも、聞いてもらいたいんですけど…………」

「聞きたくない……………というか、まだわかんないから。俺さ、お前のことを信用してあんな行動したのかわからないただ単に危ないって思つただけだから。そんなすぐ人に信じられるような奴なんていない…………だからさ、リディシアが本当に俺のことを信用したって思ったときその話を俺にしてくれ」

しばし考え事をしていたリディシアは頷き、笑つていった。

「…………わかりました、その日が一日でも早く来るよう努めします!とりえず、会社いって体に異変が無いか見てもらいましょう」

「そうだな」

屋上の扉へと近づく途中、リディシアは献花された花束から一本の花を手に取つて姫也に手渡した。

「?」

「姫様にはお花がお似合いです」

「」

そういうて屋上の扉を開けて階段を駆け下りる。

「だ、誰が姫様じゃあ！……さにじとるんじやいー！」

姫也もその後に続こうとして……

「あつ……」

ギブスで固定された足ではつまく階段を踏めず滑ったのだった……

だが、それをうまくリディシアがキャッチした。

「…………姫様、姫様にはこの最高の騎士、リディシアがついていますから安心してください」

「はあ…………ありがとうよ」

力なく笑う姫也と元気に笑うリディシアの声が会社に響いた。

夜風に吹かれて献花された花があとはただただ、夜空を見ていただけだった。

## Hピローグ

「あのひ、転校生が来るんだって」

「転校生？」

舞が笑つてそんなことを姫也に言つていた。姫也は挑戦的な瞳は相変わらずだなつと思いながら首を『きり』とならす。

「ほら、昨日もって…………いなかつたね、昨日から噂になつてたんだ」

「ふうん、そう」

「うん、そう」

「だから？」

「えつとねえ……」

会話が続かないなあと舞は思いながらも努力しようとこゝでチャイムがなつた。

「え～今日からこのクラスの一員になつたリディシア・イクシテさん。じゃ、イクシテさん挨拶してね」

そういうて先生が教壇をおり、リディシアは一度、皆に頭を下げた。

「はじめましてー・リディシア・イクシテですー・わからないこととかあるかもしだせんが宜しくお願ひしますねー」

「…………」

そんな光景を姫也は興味なさそうに見ていた。来るのは思つてい

たが、まさかこんなに早く来るとは…………

まあ、友人が増えたからよしとしようーとだけ考え、青空を眺めるのだった。

(後書き)

いかがだったでしょうか？若干コメディー色が薄いような気がしましたがまあ、よしとしてください。ここまで読めたあなたはすごいです！感想、評価などしてくれる人がいるのなら本当に助かりますので、宜しくお願いします！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8742f/>

姫には花を、騎士には剣を～名も無き墓には花束を～

2010年10月8日15時29分発行